

西鶴作品の社会学的考察

——「好色一代男」論——

六 車 進 子

一

井原西鶴は元禄文芸を代表するばかりでなく、その独自の視点に立つ人間生活の芸術的形象化は、文学史上の異彩として現代に至る歴史的過程で幾度となく再生産されてきているものである。特に西鶴の作品の再生産は、作家的立場から創作の積極的基礎づけとしてなされてきた。この文化遺産を社会学的に考察する企図の意義は、形骸化した古典の鑑賞ではなく、その現代にもつ意味とその社会的機能を正当に発掘することにある。文化遺産の生命はそれが今日にもつ意味の中にしかありえず、その考察は常に現実的要請に基づいてなされなければならない。

社会学的立場からは、文学作品は社会そのものから湧出した客観的形象として、それが基礎的に社会をもつ一つの社会的事象と考えられる。文学作品の制作活動に美的なものへの感受性、それらの表現への形式的・遊戯的態度が存在することはいうまでもない。しかしながらその制作活動は、一の表現活動として、本質的に人間が彼の共存者と共同生活するにあたりそれに適応的価値をもつ行為の一つであり、文学作品はかかる価値をもつものとして構成された一の意味組織であると考えられる。文学作品は人々の社会的共感の媒介体であり、この複数主体の営む集団生活—社会生活を地盤とするところの社会的機能を有する社会的・客観的な価値形象である。

文学作品の社会学的考察に於いては、考察の直接の対象は文学作品であるが、その究局目標を文学作品を契機づけ、根拠づけ、地盤づける面における社会の把握におくものである。存在としての

過去の文学作品を社会学的に考察する場合重要なことは、歴史によって帰結された現代の我々の芸術認識のための標準や内容的価値観から直ちに作品にアプローチし、その価値の優劣を評価するのではなく、作品の現象面からその背後の社会生活を考察し、作品と社会との本質的關係を問題にするということである。文化遺産には現代それ程重要でないものもあるが、この変化は歴史によって初めて現実化されたのであり、従って文化遺産のもつ重要性を歴史的段階において見出すことによって、我々はじめてその歴史的個性を把握でき、同時に過去と現代の類似と差異の検討を通して歴史的文化遺産の現代への意味という一般的普遍性を認識することができるものとする。西鶴の作品の社会学的考察は、それを通して我々が現在ある状況を一層よく再認識することにある。

西鶴作品の社会学的考察は、(1)作品の成立におけるそれと社会との関係、(2)歴史的定在としての作品のもつ内容と形式、(3)作者の制作態度及び文学と封建社会の一般的关系、(4)作品の現代的意義、の検討を通してなされる。ここでは西鶴の「好色一代男」論をもって西鶴作品の社会学的考察の試論とする。

二

町人階級出身西鶴の文学制作期は天和2年(1682)より元禄6年(1693)であり、彼の視圏となったのはおよそその青年期たる寛文期より死去に至る元禄6年までの間である。よって彼の制作活動は、歴史上元禄時代と呼ばれる時期(延宝8年、1680より宝永5年、1708)に至る五代将軍綱吉の治世の29年)前半の町人を対象とし、町人を正規の読者とし、そこにもち出されている素材は町

人の精神に適應しているところのものである。ここでは、彼の制作活動のきっかけとなった時代の客観的社会状況及び作品の社会的機能の地盤をなすところの読者層を考察し、作品と社会の必然的關係を明かにする。

近世の徳川幕府時代は、海外貿易と海外発展とを犠牲にしつつ、専ら内部で生活を自足させ、一の閉鎖的全体となろうとしていた社会である。この閉鎖的社会は、絶対的存在であり（「日本世界」）、長期にわたって安定し、新しく富という価値領域と、これに生活の基礎を置く町人階級の発展を示した特色ある時代である。幕府時代の安定と繁栄はほぼ寛永より寛文に至る幕藩体制の確立とそこに整備されてゆく経済体制に基づく。幕府はそれに退行的・分裂的分子の問題をほぼ解決（島原の乱を最後とする浪人問題・公家諸法度による朝廷への干渉等）し、ピラミッドの支配構造（諸大名の徳川家との血縁遠近関係に基づく格づけ、その政略的配置）に基づく集権的封建制度を整える。徳川氏の城下町江戸は同時に政治的中枢都市であり、江戸への参勤交替は政治的権力による統制、「制度的流動」¹⁾として特色づけられる。他方寛文検地の全国の実施、地方知行制より俸禄制への移行等の政策に基づいてその経済的基礎を固め、武威と富裕に基く封建体制が確立される。またこの時代に於ける鉱山業の発達、それに伴う貨幣鑄造、交通（特に河村瑞軒による海路の開発）と商品流通の拡大化、都市の発達による貨幣経済の発展は、近世大名領制によって城下に「旅宿の身」となった武士の町人への依存化と、その生活の消費的性格を促進させた。専ら利を計ることに於いて、支配・服従の関係にある武士・農民と対立する町人の興隆は基本的に農村の生産力と武士の消費に規定されながら、武士と矛盾的相互依存関係を形成してゆく。泰平による物質需要の増大に加え、参勤交替制による失費が武士の没落過程を促進したことは否定できない。とりわけ、妻子及び藩士の在府による失費は大きかった。都市生活の消費的性格（当時要求された経済倫理は生産の道徳一勤労ではなく、消費の道徳一儉約である）の封建制度への消極的作用の認識は享保期後の都市抑制論・廃止論に発展してゆくものである。武

士の経済的没落の機運は三代家光より四代家綱にかけて現われ、逆に明暦・万治期より町人が封建制度内のあるべき「分」を越え始めたとみられる（大名貸の出現）。寛文より元禄期には両者の基本的関係が動揺し、町人の著しい発展期となった。しかしこれは同時に支配階級にとって町人の存在がようやく問題になってきた時である。特に家綱の頃より顕著になる財の消費の階級的差等の法制化は、階級相互間の均衡の再編という企図をもち、ある階級間よりも武士と町人との間により強く行われた。五代綱吉が登場するのは万治・寛文に続く延宝8年である。彼は政治の再編成に着手し、それに消極的な分子を退け（酒井忠清の解任・越後騒動の裁決等）、専制政治を強化する（外様大名の幕府要職への登用による下屬者の平等化的支配）。権力・権威・威力²⁾的性格をかねそなえ、日常生活にまで政治的干渉を及ぼそうとする（密告者・検索者の市中動員）彼の注視は、最下位町人の榮華にむけられない筈はない。「ひそかに思ふに、世に有程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、天が下に五つ有。それより外はなかりき」³⁾と記した西鶴は、ここにこの政治的権力を数えていたのではないだろうか⁴⁾。封建制度下の武士・町人関係が変化をきたし、やがてこの事態が支配者の問題となってゆくのが元禄期であり、ここに形成されるのが元禄文化である。

西鶴が浮世草子に筆を転じ始めるのは綱吉治世の初期天和2年である。彼の作品内容をなす好色思想と金銭思想は、近世封建制度に於いて人間の社会関係を等質化する貨幣が武士の武威と並存してゆく時代の被支配者町人に形成された精神内容である。

西鶴時代の町人が芸術一般に要求したのは金の獲得による現実生活の無限の享樂でありその態度は物質的余剰に基く精神的要求の異常な拡充という贅沢な態度であったといえる⁵⁾。この積極的意欲の原初的形態であるさかり場の雑踏・繁栄は、浮世への執念と、群集における自由な解放性、封建的身分制度から何程か離反しつつある町人の融合度の強さを示している。彼等の積極的意欲は更に模倣による伝播、流行をもたらし、この源泉となった劇場や遊廓は、彼等の生活の中心となって

きた⁶⁾。町人の積極的意欲の諸形態はやがて時代の芸術的なものに反映され、形象化される。芸術は社会における人間間の結合手段として社会的機能をもつ。従ってそれは社会の各段階に適合すべき特殊性を見出さねばならない。ある芸術はその支持者の固定化と共に古芸術としての存在を確保し、形式主義に定着する。社会の各階級は、発展のある水準に達する時、必然的に自己に新しい芸術を期待する。町人は富の価値が支配的になると共に彼等に適合的な芸術を享受する。人々の雑踏や群衆の有様、世態や人事を描写した絵画、造形芸術における親近的・個人的な小物玩弄、都市の繁昌を喜ぶ心を示す「繁昌記」、 「名所記」類、大衆自らの評価に基づく「評判記」類、更に人間への興味と関心を露露する演劇と文芸の出現⁷⁾は、いずれも町人のこの積極的要求によって促がされ、彼等の現実的享楽を拡充しようとする希望の具体的な現象形態である。西鶴の浮世草子もかかる民衆芸術の一つとして現象化してくる。一般に西鶴の好色物は人間自然の情感を尊重し、その種々相を描写する。金を描いたものといわれる町人物は、この金を巡って現出する人々の生態を描写しようとしたものである。浮世草子、時代物・世話物に義理・人情の葛藤を演ぜしめる演劇は共にこのような社会であればこそ人々が共感し、受容に耽溺するところとなったのである。「浮世」の生活の芸術的再生産こそ西鶴時代の芸術的一般事実である。そこに於いて最もよく町人生活の特徴が見出され、その要求が満されており、芸術はそこに於いて最もよくその社会的機能を発揮しえたのである。従って浮世（「とかく浮世は色と欲」といわれていた）の文学的形象化である西鶴の浮世草子は、時代の客観的条件によく適応し、読者の要求を具象化しえたのである。

三

「好色一代男」は一代記として、一つの長篇作品と考えられてよい。それは一面その54章の夫々が諸国遊廓、遊女列伝にあるところの諸短篇の集合という構成をとり、「評判記」類と同一の社会的機能を有するものとみられるにも拘らず、主人

公の設定、それを媒介とする諸短篇の配置・その結合と統一、作者の計画的な作品企図の存在によって長篇作品とみられる。浮世草子第一作としての当作品及び一般に西鶴作品の卓越性は、「評判記」類と異なってそれが町人の「自画像」「自叙伝」であるといわれるように、町人生活とその社会的心情を形象化したことにある。それは町人の意欲の増大と多様化の過程で彼等の社会的心情を支え宿らすべきその具象化への期待に応えるものであった。しばしば人々の心情をよく支えるものはその理想化であり拡張であった。当作品の形式一短篇集合性は、遊廓・遊女列伝という企図によるのではなく、むしろ町人の理想像の形象化という制作モチーフより考えられる。諸短篇の無反撥的・連鎖的結合は内在的な必然性によって主題を展開させるところの長篇的性格を限界づけるが、それだけまた社会像の理想的純化をなすに資するものである。

巻頭「桜もちるに歎き、月はかぎりありて入佐山。爰に但馬の国かねほる里の辺に、浮世の事を外になして、色道ふたつに寝ても覚ても夢介とかえ名よばれて、名古や三左・加賀の八などと、七つ紋のひしにくみして身は酒にひたし、一条通り夜更て戻り橋。或時は若衆出立、姿をかえて墨染の長袖、又はたて髪かつら、化物が通るとは誠に是ぞかし。それも彦七が呉して、願くは咀ころされてもと通えば、なお見捨難くて、其比名高き中にもかつらぎ、かほる、三夕思ひ思ひに身請して嗟峨に引込或は東山の片陰又は藤の森ひそかにすみなして、契りかさなりて、此うちの腹よりむまれて世之介と名によぶ。あらはに書きしるす迄もなし。しる人はしるぞかし。」⁸⁾という一文を以て始まる「好色一代男」は、7才にして恋を知り、60才で女護島へ渡るまでの好色一代男世之介の54年の生涯を54章にわたって記述したものである。開巻1頁の自然美を象徴する桜や月に対する客観的態度、それらの有限性に対しここに出される生野銀山の経済力を背景とする好色への肯定的態度は、時代の物質主義的傾向の滲透力を示しながら、作者の制作企図を表明するものである。それは終章の遊興を極め、残金六千両を東山奥深く埋めて、友7人と新造の好色丸で女護島へ渡るくだ

りと呼応して作品の好色への憧憬と理想化という主題を明らかにしている。以下作者の企図を一途に生きる世之介の生涯を三期に分け、そこにみられる内容と表現様式の検討を通して社会状況及びその存在様態を考察する。巻1・2の少年時代の色咄し、巻3・4の諸国遊廓・遊女列伝、巻5以下8までの三都名妓伝は、すなわちこれを主人公の色道過程に於ける萌芽期、生成期、展開期と考えたい。⁹⁾

〈序〉

第1期は主人公7才より17才までの少年期、その色道に於ける萌芽期である。この間の作品の特徴は、内容上の異常性と表現形式上の省略性・類型性である。主人公の父は但馬の国¹⁰⁾出身で一生を京都に浮かれ暮した者である。本名は「浮世の事を外になして、色道ふたつに寝ても覚ても夢介とかえ名よばれて」とあるのみで明記されていない。父が実際に幕府と結合して採掘の請負をしていた京都の特権階級の者であったか否かも定かでないが、ここでは鉾山師か否かの問題は重要でなく、銀山の縁をもって「浮世の事を外に」していた富豪を示したものと考えられる。それは続く爛熟した都市が生み出すところの金をもった浮世人の生活描写に呼応する¹¹⁾。この夢介島原帰りの出立は、その変装の奇抜さもさることながら、生活の一切の領域—衣食住、行動様式・言語に於いて各階級が、その社会的身分・職業の類型的典型に自己を形成すること、すなわち「程」、及び「並」であって「分」をこさないという封建的規範に自己教化することが要求されていた時代の町人の「過分」の姿を伝えている。父の場合と同様ここでは母は当時貴族の娘と比較される遊女¹²⁾、中でもその最高の地位たる太夫と設定しさえすればよかった。西鶴が母としてあげた3人の遊女名は特に太夫個有のものである¹³⁾。この両親の説明、その存在は、主人公に生物学的な遺伝的早熟を予想させ、心理学的環境を準備するものと考えられようが、この側面を強張するには両親の個性的描写及び話の展開過程に於ける彼等と主人公の内的関連の説明が不十分である。主人公の誕生に関する両親の説明では、富裕の遊蕩者と太夫は抽象的人間、

社会的に一定の典型となっている形式的人間である。一般に階級制度の強固な社会に於いては、個人的資質、能力、活動は認められず、個性の伸長もみられない。ここでは人間描写も個人の運命、その性格の発展、その心理に関心を示さず、一団体、一階級の代表者としての典型的人間像の類型的描写が支配的となる(武士気質・町人氣質等)。同じことは善悪正邪の抽象概念の直接的具象化となっている、血肉の無い人物描写にもみられる。当作品に於ける典型的人間は、理想像の造形という作品の企図にも因るが、それが基本的には封建社会に於ける人間の団体的・集団的存在に基づき、一定集団の社会的心情の最もよき具象化になりえ、よって人々の間の社会的共感の媒介者としての社会的機能をよく発揮できるということに基づいている。ここでの両親に関する説明は、それが主人公の遺伝的早熟と心理的環境を説明するものというよりは、むしろ作者にとって、読者によって受容されるべき好色人を描くための最も有効な手段であったと考えられる。

続いて作者は主人公世之介についていう。「あらはに書きしるす迄もなし、しる人はしるぞかし」。これは源氏を翻案しながらそれを暗示するのか、或は世之介は必ずしも源氏をモデルにしていること¹⁴⁾から、当時の読者がそれと名指すことのできる実在の粋者を暗示するのか、それは定かでない。しかしこの省略的表現は、前述の両親の明示を背景にして、唯これ丈で作者がひそかに読者の理解の反応と讃嘆を予期しようという自信を示すものである。これは作者と読者との間に共感と呼び起しうる、或は共感したいと願望している共通の表象があって初めて可能なことである。父のかえ名は夢介、その子の名は世之介¹⁵⁾という。作者が意識的にか無意識的にか父と子に夢と現実を配置した意味はなんであろうか。西鶴以前の作品が単に現実の外表に取材することによってのみ現実世界とのズレを糊塗しようとしたのに対し、西鶴作品は時代の世相を、表裏の美醜と共に暴露し、性欲、利欲に狂奔する生活を描写した点にその独創性が認められるが、これは浮世話を実生活から切り離した次元で取材する仕方から、浮世を実生活の場として、その現実を現実の高さか

ら取材する仕方への推移を物語るものである。父夢介は「浮世の事を外になして」、すなわち渡世の家業、生計活路を除外した夢の世界に色道一筋に生きた者を現し、その子世之介はその夢を現実 に於いて実現してゆく途上で生きた者を現すものとみられよう。従って世之介の色道途上に於いては、彼が粋者として現実化されるための社会的に必要な諸条件が提示されるものと考えられる。

主人公の生活の環境、両親の説明及び少年期の異常な性行動の描写の内に、作者が如何に時代の典型として理想的な好色人を描こうとしているかを窺うことができる。主人公の行動の異常性は、読者の理想を切実に示し、彼等の強い共感をよぶものであった。

＜破＞

第二期は主人公18才より34才までの青年期である。すなわち18才に江戸の出店に修業に出て、遊蕩の末遂に勘当され、諸国を放浪する間の色道生成期である。しかしその行動は前期と同様に無拘束な展開としては進展しない。彼は多様な職業を遍歴しながら、多くの恥辱を体験しなければならない。この期の作品の特徴は、内容の波瀾万丈性と、表現形式における素早い連想的発想に基く話の展開と、諸国の相の写実的描写である。この内容と形式との統一において展開される第二期主人公の背後に、前述の町人の理想像の形象化という作品企図が同じく考えられるであろう。すなわちここでも第一期の素質・環境の提示につけ加え、更に粋者に必要な諸条件を提示し、それと平行的に主人公の行動を展開してゆくのである。

ここで主人公は人妻に恋すること二度に及ぶ¹⁶⁾。ここにみられる主人公の完全敗北は自由恋愛に対する客観的・社会的規制の強さを示しているが、更に注目されてよいのは、その状況における主人公の態度が極めて呑気であり、失敗を失敗とも思わないことである¹⁷⁾。主人公は自己の内に強い自由恋愛を感受し、それを社会的規制に抗しても現実化しようということを、第一義的には考えていない¹⁸⁾。西鶴作品はしばしば自由恋愛における人間性を追求し、人間主義を謳歌しようとして、それが挫折し、結局遊里に追いやられてゆ

く近世人を描写していると解釈されている。これは、その論理的帰結が正当であるにも拘らず、不明瞭な非歴史的抽象概念にとらわれ、現代的意識で歴史的定在を割り切るものに他ならない。現代の我々の人間観からする近世の人間解釈よりも、近世の人間の様態をありのままにみてゆく方が、より本質的に社会と人間（封建と近世人）の関係を把握できるものとする。近世人が何故に遊里に積極的に結合していったかという側面を考えることは、彼が遊里に追いやられていった側面を考えることと同様に重要なことである。それでは社会的規制の存在、好色思想の社会的広がり¹⁹⁾、町人の浮世への強い好奇心を伝える以上に、極少とはいえこの主人公に敗北までさせながら対地女関係を取材したことの積極的意味は何か。それは作品の企図にそって考えられる。第一期においては、主人公が色道の覇者に成るべき先天的条件が示されているがこれは必要な条件であっても決して十分な条件ではない²⁰⁾。町人が色道に求めたものは、遊興という一般的目標の下で社会的無差別を現実化する実力一富の誇示と精神的解放感の獲得ということである。更にそこにはいわば彼等の全的存在がかけられているから、彼等が自らが意欲し承認する生活とモラルが積極的に追求されていったものと考えられる。封建制度の下で、町人のもつ価値が優先し、その意識が満足される遊里の生活と生活意識は、そこが単に個人的欲望充足の場ではなく、既存の諸価値間の力関係の不均衡化による富裕町人の孤立化を緩和するという社会的機能をもつことによって、個々の町人の個人的意向に依ってではなく、個々人は他の個人の意向をさまたげないというような緊密な団結的構造に基く集団的生活と、同じく個人的利害を越えた特殊な集団主義的意識（郭の意気）によって形成される。遊里は町人の意欲が共同的に促され、それが最も純化した形態で客観的に具象化したものといえるが、彼等はこの客観的に促され承認される生活と生活意識の後天的な獲得なしにこの遊里の達人たりえないのである。この集団的生活と集団主義的意識を立前として享楽に耽るということが、この時代の色道の意味に他ならない。世之介の対地女関係における敗北は社会的規制の前では

特殊的条件は無効力であるという事実の軽視によるものであるが、同じく集团的規制を立前とする遊里の達人として主人公を描いてゆこうとすれば、ここにおける社会に無理解な、道理無視の彼は否定的にとらえられねばならないであろう。元禄期の町人は封建的社会規制に破れながらその敗北を認めず、彼等が積極的に支持できる生活と生活意識を形成しようとする意欲をもっていた。更に西鶴は主人公を粹人にすべき遊里における智慧を与えることを忘れなかった²¹⁾。

以上のように作者は対遊女関係を主軸とし、社会的規制の前での敗北にも少しも傷つくことのないような近世好色人を取上げ、元禄期町人生活の大きな契機となっていた好色を描こうとしていた。この好色は性欲といった人間普遍の現象をさすものではなく、従って好色人も抽象的な人間性と直ちに比較されるものではない。好色人は近世封建社会に於いて人間が個的存在として自己を意識した最高の存在形態である。

しかし前二者の獲得はなお粹人として三都に通用する資格に充分ではない。彼の波瀾万丈の放浪生活に休止符を打つには今一つの資格を必要とする。町人生活に意欲と光彩を与えていったところの文化的内容には種々のものがあげられるが、とりわけ彼等の意欲を基本的に支えた金の獲得ということはその根本的なものであった²²⁾。更に一般に当時の処世術では40才までに金を貯蓄し、後はじめて遊興することが教えられている²³⁾。このことを考え合せると、金の修業を放棄し、社会に無理解な世之介が、この期に於いて恥辱の責を受けなければならないのは当然である。彼の33才の時の体験²⁴⁾は遊里の本場の遊びの最大の条件が金にあることの確認である。たいこ女郎にまで振られ、無常の気分悩まされ、虚無のどん底を彷徨う主人公の耳に入ってくるのは「奥ぶかなる家にて天秤はり口の響き」²⁵⁾である。偶然、災に遭遇する主人公は、生死の境いを越えようとする時点で遺産獲得のチャンスにめぐりあう²⁶⁾。主人公が最悪の事態で耳にする「天秤はり口の響き」といい、死と生の次元でさし出される金子といい、共にその生活契機としてもつ意味、作用力の大いさを如実に物語っている。町人にとって金は心であり、

その生存は金の獲得・蓄積と不可分である。町人のこのような熱心は世之介を死際に放置させておかず、更にその金の威力によって漂泊者を一躍大尽にさせずにはおかない。この間の話の飛躍的展開は、巻頭よりの作者の企図にそうものであるが、同時に読者の側からの了解的・積極的承認の態度に支持されて可能なものである。一般に封建社会の文学は、個性の人間の性格心理の克明な内面描写が閑却されるのに反し、論理をくぐらぬ連想的発想に基く外的事件の突発紛糾、めまぐるしい局面の変化による話の飛躍的展開を特徴とする。それは偶然的事件の変転にむけられる作者の手腕によって、読者の感興を一層そそるものである。文学の様式におけるこの特徴は社会の体統的・段階的支配に基く人間の集团的・類型的存在様態と、その各集団内融合の強さと対応する。主人公の漂泊人から大尽への飛躍は、作者と読者の社会的距離がなく、作者が自らの心理的動きと同じものを読者に期待できるという意味に於いて、両者の融合の強さと志向上の一致を示している。

作者は初めから主人公をすべての人間が感嘆せずにはおれないような人間として設定していない。当作品の主人公はあくまで「浮世之介」である。この世之介が近世町人の理想的典型となるためには、社会に無理解な特殊性が規制面を体験する過程と、理想界一遊里に入るための金の獲得ということが必要としたのである。第一期と第三期の間にこの試練の時期を入れたことこそ(例えば「源氏物語」の主人公と比較して)この作品の近世的性格を特徴づけるものにほかならない。特にこの作品に金の契機を看過することは、町人を対象とし、町人の制作による当作品の独自の意味を殺すことになる。勘当後の世之介の生活は恥辱様々な体験にみちた流動人のそれであるが、それは同時に一般的に近世の浮世観²⁷⁾を具象化していると考えられる。この流動的生活は、根本的に、町人が封建制度によって与えられている彼等の地位に対して、何程か過分になり、その社会的秩序に対して不満足になっていった時代の彼等の社会適応の一形態を示すものと考えられるからである。主人公の流動的生活における規制にとられない自由、終世悔を知らない享樂への意

欲と零落しても卑しさに陥らない意気は、町人の置かれている被支配的社会地位によるものである。

<急>

第三期は主人公35才より60才までの壮年期、百万長者の「訳知り」となった彼の三都の名妓を相手とする色道展開期である。ここでは概して天和期以前の最も理想的な太夫²⁸⁾を取上げ、彼女等を対象とする主人公の行動が各章前後無関連的に、独立したエピソードとして描写されている。従ってここでは町人の理想である遊里人種の実体と、それを描く作者の態度を通して時代の内容と町人の社会にある在り方をみてゆく。

作者はまず巻5の1(35才)をもって世之介の生涯に一線を画している。それは粋に到達せざる彼と粋に徹する彼、実質的には富まざる彼と富める彼との間の一線である。ここに「訳知り」の世之介の根本的基礎として金が表示され、それが「訳知り」の意識形態の大きな概念契機をなすことが物語られている。この町人の粋という意識形態は町人が遊里に求めた内容と、遊里の組織的特性の両側面からよく考察されねばならない。

町人が遊里に求めた内容には二つのことが考えられる。封建制度が有する道徳から自由であり、自己の特殊性に基づく全体からの解放感が享受できるといふ精神的自由と、社会的法度によって制約されている町人の生活力の誇示・浪費の快感が無制限に味わえるという物質的自由である。両者の区別は形式的であって、共に諸価値の位階的分化を前提している全体社会の力の関係に於いて、富力の拡大化がもたらした町人上昇によるその自己発現の内容の二つの側面にはかならない。遊里における町人の巨大な浪費²⁹⁾はそれを代償として得ようとする封建的道徳からの自由と密接に結合している³⁰⁾。富によって、自己意識の内容に於いては他に依存せず、潜在的に自己について高い見識をもつ一方、それを社会的に実現できない町人は、ただその富と自己意識の充足を積極的に是定支持し、保障してくれるものの存在に対し、富を誇示しつつそれを大胆に浪費することによって自己充足をはかることを余儀なくされる。町人のこの富

の威力を保障してくれるものの存在を前提としての金の誇示と浪費は、虚栄の一形態であるといえる。町人の金銭軽視の態度はそれ自身金のもつ威力への強い関心、その誇示への強い意志と不可分である。遊里における町人の意気地はこの金の誇示・浪費という金の上の虚栄であり、それは同時に、そこにおいて金の現実化的必然性が否定されている封建社会に対する一種の反抗を示す意味をもつ。町人の虚栄が発揮できる対象は社会の基礎的な支配意識の分布状況及び遊里における価値一金の分布状況に従って決定されるであろう。それはさしあたって遊女である³¹⁾。ここで町人の粋意識の検討は彼が関係する遊女の実体、更に遊里の組織的特性の考察をもってなされねばならない。

遊里組織は人間を構成要素とし、人間の自然性を構成契機としながら遊女を商品化し、その管理販売を通して貨幣蓄積を行う組織であり、人間の自然性と、貨幣の合理性の接点、交叉点である。しかし原則的には遊里は合理的手段の支配に優位をおく非合理の世界である(金の切れ目が縁の切れ目)。遊里は貨幣の媒介による人間の等質化、等価値化の要請に基づき一の社会的交叉点となる。遊里はその合目的的性に基づいて個人的・特殊なものより、全体的統一の契機に重点をおく組織である。更にこの遊里の全体的秩序の維持は、全体社会から何程か離反した町人の自己発現という積極的意欲、全体社会に対して、個人的利害を越えてその集団の独自性を主張しようとする意識によっても強化される。貨幣による人間の等質化、全体的統一契機の重視、成員の組織支持の態度は相関連しあって遊里組織に消極的な要因一非合理性の合理化に積極的に作用する。遊里における合目的的性はその理念的側面であるが、現実には組織とそれを構成する個人との間には緊張関係があり、組織に対する消極的現象がおこることはいうまでもない。ここで遊女の意気地は、自己の肉体が商品化され、自分を自分で支配できない一機関であるものの自発的自己否定の態度、或はそれによる観念的自由獲得の内にある意識と考えられる。それは金そのものの直接的支配から自己を守り、金をもつ者の優越性をも拒否するという遊女の置かれている人間関係が彼女等に強要する

一種の反抗の意識³²⁾をも内包する。遊女はここで財産を投げうって伊達をつくし、意気地に打込む大尽達のその競争の冷静な観察者となり批判者となる³³⁾。一般に遊里においては異性間の二元的な動的関係そのものが絶対化され、この人間関係が歓楽の要諦する「媚態」³⁴⁾の基礎ともなっている。これは根本的には前述の遊里の合目的組織性にに基づいているといえる。それは同じく遊里の組織性に根拠づけられている遊女の意気地によって一層その存在性を顕著ならしめるものであり、遊女によるこの二元的人間関係の保持は遊女自身の自由の擁護にほかならない。遊女の意気地と町人のそれとは相互に張り合いながら「廓の意気」という特殊な意識形態を形成してゆく。しかしこれが現実的必然性でなく、観念的に考えられた可能性の上に在ることは、それが現実に関する知見に基づく現実への無関心（諦め）を同時に内包するものであることを示している³⁵⁾。「訳知り」の世之介が歓楽界の謳歌者にして、他面冷静な傍観者である³⁶⁾中には現実に超然とし、無目的・無関心な自律的遊戯に身を託す諦念の意識は否定されない。しかしここにみる諦念の意識が、人間の意志と行動を否定する無力感・宿命観に裏づけられた中世的意識に基づくものでなく、どこまでも近世的であることを考えることは肝要である。富という価値種類を新しく保有する町人には人間無力感に代るに人間絶対感、宿命感に代るに積極的現実感がある。町人の諦念は同じく諦念といっても彼等の讚える花街の中にある。現実の矛盾を矛盾として消極的に受けとめ、引退るのではなく、なお超越的可能性を求める積極的意欲は、形の上での階級秩序に対し、人間等質化の手段と結合している町人に於いてはじめて可能なことである。粹とは、このような近世町人の社会的意欲が封建制度の下でその存在実現を完成したものといえるであろう。

主人公の家庭生活・子供・両親の消息については夫々一章に記録されている以外にも知りえない。彼は色道修業に大悟徹底した後「ふっと浮世に今と云う今こころのこらず親はなし、子はなし、定る妻女もなし」³⁷⁾と独白して女護島さして舟出する。広く諸国を歩き、遊里の意気にその最大の

生を感受し、自ら訳知りと称して大悟した生涯を生きた世之介一代の女護島への島渡りの結末は、町人の理想の極致であったといえよう。

四

「好色一代男」は現実における諸矛盾、好色生活に否定的な要素（経済生活、封建的家、遊女の人間の苦悩等）をそのまま反映しないことによって、町人の理想像を形象化したものである。好色一代男とはかく分裂症的に発見された人間であり、逆に分裂症的になることによって発見しえた一つの可能性であるといえる。この作品はこの点において作者の主体性の強く参加しているものである。そこには主体を後退させて、対象の客観的な姿を受動的に在りのままにとらえ描写したというより、むしろ作者の意識的・作爲的制作態度が窺える。これをわずか1年半後の「好色二代男」（貞享元年）と比較して考えると、「一代男」の町人謳歌の思想をそのまま客観的状况そのものの反映とみるのは妥当ではない。当作品に関してはその積極面に固執する所論と消極面を強張するそれがあるが、それらは共に歴史的社会的地盤の上に、そこでの人間主体と環境の相剋から生れる人間行為の帰結としての文学作品を一義的に、或は今日の優位性より解釈しようとするものである³⁸⁾。ここでは作品の歴史的個性も、西鶴の歴史的存在の意味も看過される。封建性と好色思想の関係、その好色思想を中心とする町人の姿を展開してゆく西鶴の独自の態度、その中にこそ封建性と西鶴作品の関係、一般に社会と文学の関係がよく考えられねばならない。

作品を根拠づけた西鶴的制作態度を考える時ここに手がかりとなるのは当作品が転合書であるということである³⁹⁾。人間の環境に対する適応行動は、根本的には環境との間に何らかの問題解決を迫られるところに考えられる意味構造であるが、それは単に外的な抵抗のみによってではなく、主体の後天的経験、選択的知識による内的な要因によっても規定されるものである。転合書ということにはまず戯作意識に基づく制作ということが考えられる⁴⁰⁾。しかし人間の環境に対する適応の仕

方としての「てんがう」のもつ意味は、それが、充実した生命力の自然の発露が何等かの規制を受けて阻害されたものの自己救済、自己解放の欲求の現われであるということにある⁴¹⁾。「好色一代男」の転合書の意味にこの顛狂的要素があることは、基本的に西鶴に抵抗感を与えた客観的事態が決して町人にとって手放して謳歌できる楽観的なものでなかったことによって察せられる。銀徳によって叶うことのできないものの内に時の政治的権力を意識していた西鶴の第一作が、それに反して余りに大胆なものであることは、それが好色思想の、現実的基底から離れた次元での純粋な形象化であり、現実の諸矛盾を代償として追求しえた可能的現象であったことによって説明される。作品原稿は、西吟の言によると「月にはきかしても余所には漏ぬむかしの文枕とかいやり捨られ」⁴²⁾であったものである。この作品が転合書であることは結果的に戯作を意味するものであっても、それは作者の没主体的なあそびによるものではなく、歴史的環境に根本的に契機づけられたものであり、作者の、それに対する適応を教える主体的な行為に基くものである。転合書と作者の主体的態度とは矛盾するものではなく、これは転合書によって作者が主体的になりえたという封建制度における社会と文学制作者の関係を示しているものである。また我々はこの作者の制作態度における主体性の意味を看過して、同一作者がやがて続いて封建的歪曲の中からしだいに現実を媒介とした町人の悲劇にふれていった連続の側面を理解することは出来ないであろう。西鶴の好色物から武家物をへて町人物へと移行してゆく制作活動は、それ自身町人の町人による自己認識の深化とみることが出来る。この発展的過程への契機はすでに西鶴の「好色一代男」の制作態度の内にみられ、一般に好色物制作期にみられるものである。「好色一代男」には消極的思念と積極的志向が並存している。また好色物の「一代男」と「一代女」の夫々にみられる楽天性と悲観性の並存は、同じく町人物の「日本永代蔵」と「世間胸算用」の比較においてみられるものである。西鶴の制作活動11年間(41才から52才)における制作態度は決して楽天性から悲観性への更に肯定から否定へのデスパリ

ットな変質を示さなかったが、それにも拘らず、そのジャンルの移行は町人の独自の存在としての自己の認識の深化とみられる。ここで西鶴の社会的態度の基本的な変質はむしろ彼の俳諧から散文学への移行にみられるのではないであろうか。

このことと、以上みてきたような観念性の強い作品が、俳諧師西鶴が俳座を退いて作家となる第一作として出されてきたことを一般に芸術分野と社会との関係を考える上で注目したい。一般に芸術の諸様式は社会的諸結合様式、結合類型、巨視的社会と対応されるが、文学は芸術分野の一として他の諸分野とは異った性格を有し、それ自身ある一定の社会的存在様態と精神的状況を示すものとみられる⁴³⁾。一般に一語、一文に象徴性を求める求心的な俳諧に対し、外延的遠心的な散文学は、人間間の心理的交渉を可能にする聴覚的要素にかわって、より多く視覚的要素に依存し、組織されていない不確定な、多数者の集合を予想するところの制作である。従ってその制作・受容の場は、それが集団である俳諧と異り、直接的に個人であり、環境との密接な接触から何程か超出したところにあり、それ自身何程か観念性をもつものである⁴⁴⁾。元禄時代の客観的状況の停滞性が西鶴をして談笑性をもって特徴づけられる俳諧の世界から個室の沈思が基調をなす散文学の世界への移行をなきしめ、そこにおける観念の再生を企図させたのではないであろうか⁴⁵⁾。

五

「好色一代男」の好色思想の抽象化、しかも尚大胆な理想精神に貫かれた人間像の具象化に西鶴の消極的思念と同時に積極的志向をみることが出来る。その転合書による現実の矛盾の超脱こそ最もよく封建社会の被支配的地位にあるものの姿を表現しているといえる。同時にそれは西鶴を単に封建社会と自己の調和美をうたいあげる風俗作家とさせなかったものである。その方法は生活の立脚点をどこに求めてゆくかを追求するのではなく、受身的に矛盾を反映し、矛盾関係を正しく矛盾関係として描かない消極性を基調とするものであるが、あくまで町人の生活に対するしぶとさを

肯定的に描く積極性に支えられている。西鶴作品は封建社会の政治には触れず、封建社会の人間疎外の結果を主題としている。これは政治や社会機構の支配権が大衆の側から切断され、一方の側に独占され、大衆は政治・社会機構を一種の自然的存在として享受しているという封建社会の文学の一般的性格と考えられる。その文学は社会の人間疎外に直接触れることなく、また政治、社会機構を除外した生活そのものに固執するのほかに、その結果、生活の最も原初的な性欲・物欲を文学の主題としなければならない。この物欲と性欲の世界に零落してもなお執念深く生きようとする町人の姿を同じ姿勢で描こうとした西鶴作品の中に、我々は封建文学リアリズムの極致をみることができるのである。

現代社会の一層複雑化し、巨大化した社会機構と激変している経済制度（資本主義）の下で、人間は人間の量的にのみ存在する大衆の中の抽象的且つ類型的存在となっている。彼は巨大な機構の単なる部分的存在となりながら、他方それを離れては存在しえず、運命的にはそれに強く連続させられている。しかもこのような人間は量的平等と自由の中で抵抗感を失いつつある存在である。封建社会において被支配的地位にあったもの、とりわけ浮世草子の作者西鶴に意識された人間には「日本世界」での気安さ（これは一般に我国封建文学の温室的性格を特徴づけるものであろう）と同時に社会への抵抗感があった。今や「日本世界」ではなく「現代社会」にある我々が、西鶴作品の考察を通して、その再生産過程から考えなければならないことは、封建制度下の西鶴と異なり常に新しい可能性を志向する意欲、より厳しい現実克服の意欲でなければならないであろう。

- 1) 蔵内数太「社会学」参照。
- 2) 蔵内数太「社会学」参照。
- 3) 日本永代蔵、巻一の一。
- 4) 西鶴集下(岩波書店刊行、野間光辰校註)補註七。野間光辰「西鶴と西鶴以後」(岩波講座日本文学史、第十巻所収)参照。
- 5) 日本永代蔵、巻四の一、巻二の三。西鶴織留、巻五の一。日本永代蔵、巻三の四。参照
- 6) 日本永代蔵、巻四の一、巻三の四。世間胸算用、巻二の三、町人鑑、巻一。参照

- 7) 石田一良「町人文化」参照。
- 8) 好色一代男、巻一の一。
- 9) 尚「好色一代男」を「源氏物語」のもじり(翻案)であるという観点から、前者の五十四の各章を後者の五十四の各帖に対応させ、よって世之介を光源氏と対応させて考える研究(山口剛、西鶴好色本研究 日本文学講座第8巻所収)があり、両者の部分的対応関係は今日では西鶴研究の常識となっている。しかしここでの作品検討に於いてこの問題自体は直接的に考察の対象ではない。「源氏物語」は「好色一代男」制作と同じく参与している他の古典一伊勢物語、徒然草、謠曲花月、松風、鉢木等と共に作品としての芸術的形象化に参与するものと考えられるが、ここでは、それはそれが西鶴及び読者層にもつ意味(彼等の生活契機、或は教養として)を示す資料としての意味をもつにすぎない。ここでは文学作品をその有する目的態の一としての社会的共感の媒介者たる社会的機能の側面から考えようとするのであるから、作品の古典との関係もこの意味にそって考えられねばならない。所詮制作過程に於いて作者の脳裏に「源氏物語」があったとしても、彼は前述の客観的状況の契機づけをもってはじめて「好色一代男」を制作したのである。
- 10) 生野附近を指し、この鉱山は天文十一年(1542)二月から採掘され、石見佐摩の銀山の採掘方法が伝えられて以来、天和期にも興隆であったという。
- 11) 註8、巻一の一引用文参照。
- 12) 「此巻にしてつたなきうかれ女のことわざまで書加え侍る事、猶ひとかたならぬ恐れなり。さて人のあざけりなきにしもあらず。しかはあれども此道は高き賤きへだてなく心にかよふ道なれば、その品をかへり見ずただひとすじの実有る情をしるべに書侍る」名女情比(延宝9年)
- 13) 「判云先此名不都合也。惣じて太夫天神かこひの名とて、別々にわかつて有る也。然れども亡八文盲成によりて、わが持たる女郎の鼠鼠といひ、又其家につきたる名なども有。よき名といふを幸に、女郎の高下をもわかつたず、むりやりに名づくる事也。たとえば吉野、野風、三夕、葛城、万里、浮船、初音、唐土、薰、八千代、などいふは、しかと太夫分の名にて、おぼろげの女郎に付べき名にあらず、さるをあやしきかこひ半夜などにも此名有り、痛むべし、悲しむべし」(傍点一六車)まさりぐさ(明暦2年)
- 14) 世之介のモデルとして明らかなのは、彼35才のモデル佐野紹益のみである。その父佐野紹由は名ある連歌師であり、室町以来紺灰商人の座頭として富を蓄積し、近世初期には全く商売を離れた能衆(「好色二代男」第六の四参照)の典型の一族であるが、紹益の頃には大名貸などしていたという。西鶴のいう能衆、分限者、銀持が具体的にどのような町人を指すか定かでないが、それは幕府権力に寄生する上層町人の一群(幕府御用達の御呉服所町人、金銀朱座の御用商人等)と大名貸を頂点とする大資本を有しない限り出来ない商売に従事している町人の一群(両替屋、酒屋、材木商、米商人等)であると推測

される。

「浮世のことはしまふた屋の金左衛門を誘行て、同じところの瓢金玉」（「好色一代男」巻五の三）とある仕舞多屋は上方では大名貸の町人を指し、一代男はこの大名貸を頂点とする大町人の一群の一人と考えられる。（西鶴集下、野間光辰校註、補註64.65参照）。同級の町人については日本永代蔵、巻一の三参照。

- 15) 巻一の四に「浮世之介」とみえる。「世」とは「浮世」と同義と考えられ、後者は当世、現実に対する言葉である。
- 16) 巻三の七、巻四の一。「好色一代男」では他に巻二の三があるのみである。
- 17) 前掲各巻名章参照。
- 18) このことは作品に登する地女が極少であることによっても明らかである。作者の主眼はあくまで対遊女関係であり、粋人の形象化ということにある。「54才までにたはぶれし女3742人」（巻一の一）とある中で地女と認められるものは、次の七名である。前述三人の人妻。上臈（巻二の二）、裏家の娘（巻二の七）、大原の女（巻三の四）、御殿女中（巻四の四）。
- 19) 巻三の四、巻四の四参照。
- 20) 巻三の五参照。
- 21) 巻四の二、巻四の三、巻四の五参照。
- 22) 主人公が阿替町の春日屋へ金の見習いに遣わされたのがわずか9才である（巻一の三）。
- 23) 日本永代蔵、巻四の一、西鶴織留、巻五の一参照。
- 24) 巻四の六参照。
- 25) 巻四の七参照。
- 26) 巻四の七参照。
- 27) 「浮きに浮いて慰み、手まえのすりきれも苦にならず、しづみいらぬころだての水に流るる瓢箪のごとくなる」（「浮世物語」浅井了意）。
- 28) 高橋「難波金正」（大阪新町遊女評判記、延宝8）にみえる。三笠「桃源集」（明暦元年）にみえる。吉野、寛永8年退廊。高尾、万治年間在廊。
- 29) 「好色二代男」巻七の二参照。島原の太夫を一年つとめる費用は西鶴によると銀29貫という。現在の額に換算するとおよそ1015万円くらいになる。（貞享期米価一石銀40匁見当、現在14000円とみる）。
- 30) 置土産、巻二の三参照。
- 31) 巻五の三、巻七の一参照。
- 32) 巻七の一参照。
- 33) 巻六の六参照。
- 34) 丸鬼周造「『いき』の構造」参照。
- 35) 巻四の二、「好色二代男」巻八の一。
- 36) 巻六の七。
- 37) 巻八の五。
- 38) 「好色一代男」はその最後のくだりをもって、そ

れが近世町人の上昇的意欲の謳歌を象徴するもの、或は反対に近世町人の人間主義の限界を示すものである等と論じられる。これらの見解は正当な歴史的認識と作品考察に立脚しない点に於いて妥当でない。最後のくだりは粋人を描こうとした作者の理想の延長であり、作品の構成要素に好色の対立物を導入しなかったことの当然の帰結である。女護島渡りがたとえ前進に考えられるとしても、それは単に色道に於けるそれであり、好色のみが生活の契機を成すのであれば、その自然的消滅は自明的であろう。又本来歴史的な好色人を没歴史的な形而上学の間人観から裁断することは妥当ではない。結末が後退的現象とみられるとすれば、それは巻頭よりの好色生活の理想化の帰結であり、破綻はその巻頭よりあったというのが正しい。

39) 巻八、落月菴西吟。

40) 「好色一代男」を主として「源氏物語」の形式的なまじりと解し、従ってそれを余技の作品とみるのはこの立場に立っている。しかし作品の検討は、それが単なる戯作意識に基く古典の翻案以上のものであることを示している。「好色一代男」には、「源氏物語」と比較したとき、貴族政治と武家政治、自然経済と貨幣経済の相違、作者の社会的地位に於ける支配者と被支配者、作者の女性と男性等の相違に基づく歴史的個性がある。「一代男」が「源氏」の翻案であるとしてもそこには当然翻案されるべきものがあつたわけであるが、ここに於いてこの見解が意味をもつのは、「源氏」が西鶴等俳人仲間では社交的常識となっていたこと（暉峻康隆、西鶴、評論と研究（上）参照）、更に作者が働きかけようとする読者に於いて、それが積極的支持をうけ、彼等の生活の文化的要素となっていたこと（西鶴織留、巻一の三参照）を示している限りに於いてである。「一代男」の背後に「源氏」があるのは「源氏」がその態度・方法上で最もよく共感できる古典であり、作者が予想した読者層に影響力をものものと考えられたからにすぎない。

41) 野間光辰、西鶴と西鶴以後（岩波講座、日本文学史第10巻所収）参照。「てんごう」は「癩痢」の東国訛であるが、この意味に於いては、「てんごう」は「癩狂」と書ける。

42) 巻八、落月菴西吟。

43) 蔵内数太「文化社会学」参照。

44) 山本健吉、俳人の世界（岩波講座、文学6所収）参照。

45) 野田寿雄、西鶴の散文精神（国民文学の課題、日本文学協会編所収）、参照。

〔附記〕 本文は修士論文の「本論」を中心とする要約である。